



東北の技

漆喰左官

職人の町に生まれた少年は左官を志し、十五歳から長野県で年季奉公を始めた。共同生活の中で仕事を覚え、早朝練習で腕を磨いた。やがて帰郷し独立、千年以上の歴史を持つ漆喰の名工となった。この道五十七年。「息をする壁」の伝統を受け継ぎ、今も技術の向上に励む。

かつて最上川の舟運で栄え、職人の町とも言われた山形県大石田町から東へ二十数キロ。奥羽山脈の山麓を下ると、屋根が三層、四層に重なる木造旅館が川岸に並ぶ。大正期の面影を残す銀山温泉（尾花沢市）。雨戸を納める戸袋の鍍絵が漆喰壁に映え、湯治場の風情を引き立てる。

鍍絵とは、塗壁や戸袋の戸蓋に文字、家紋、松竹梅の模様などを鍍で浮彫りした漆喰の飾り。江戸時代中期から土蔵の妻の外壁に流行し、やがて室内の壁や欄間にも普及した。山形県では内陸の最上川流域に土蔵

の鍍絵が分布する。

銀山温泉には大石田町の伊藤富夫さんが戸袋に漆喰塗と鍍絵を施した旅館が五、六軒ある。土壁や漆喰を塗る左官は作業をすべて現場で行うが、時には戸蓋を自宅近くの作業場に運び、漆喰を復元する。

その鍍さばきは緩急自在だ。下塗りからムラ直し、中塗り、上塗りへと進み、最後の本磨きでは手のひらも使う。上塗りした漆喰を鍍で押さえ込み、さらに手のひらで何度も撫で、鏡のような壁肌を磨き込む工法で、漆喰の最高級仕上げとされる。



text: Katsuaki Nirasawa, photographs: Kiyotaka Shishido

鍔さばきには、手のひら、指先まで使う漆喰塗り。

白漆喰と黒漆喰が分かれる角の部分は、白と黒が混ざらないよう人差し指の腹ですり上げる。

「何日も続けていると手が荒れる。皮膚がすり減り、穴があいたこともある」。年季が入った手のひらはつるつると赤みを帯び、漆喰磨きには好都合の状態になる。

漆喰は日本建築に古代から伝わる塗壁材。海藻類を加工した糊、繊維質材料の□を石灰に混ぜ、水で練ったもので、土壁の上や、小幅板を間柱に取り付けた木摺り下地などに塗り重ねる。乾きが遅いので一回の塗厚を薄くし、塗り回数も多くして強度を高める。材料の種類や割合、色、工法は地方によって異なり、職人独自の工夫が多い。

伊藤さんの白漆喰は、貝殻を粉にした貝灰や布海苔、麻のツタ（刻んだ麻糸）などで作る。黒漆喰には灰墨を使い、ツタは入れない。これをバケツの中で一年半ほど水に浸し、灰汁を出したうえ、布袋に入れて不純物を取り除く。濾した漆喰は「漆喰のろ」と呼ばれ、磨き仕上げ段階で生乾きの漆喰の上を薄化粧のよう

に塗り重ね、鍔押さえを施す。

黒漆喰の場合ももう一つ、吸水性のある雲母を本磨きを使う。粉状の雲母を布に包み、ボンボンと漆喰の壁肌につけると、壁肌の水が染み出る。水気を拭き取っては鍔押さえを繰り返す。鍔が効かなくなると手撫でを行う。「雲母の粉は白い。黒漆喰に傷を付け、粉が傷に入ったら取り返しがつかない。爪の手入れ、肌荒れ一つにも気を遣う」。

手間と技を尽くした漆喰壁は、湿気を吸ったり吐いたりする調湿性をもち、室内に湿気をため込まない。磨き仕上げで耐久性や耐水性が向上し、長持ちで美しい壁になる。

伊藤さんは中学校を卒業後、長野市で左官業を営む従兄に弟子入りした。同級生のうち八割が大工、左官を希望した時期。幼児期に父を亡くしたこともあり、技術職で身を立てる道を選んだ。職場では早朝、職人が来る前に鍔の使い方を練習した。この早朝練習のちに役立った。

東京、横浜の現場を経て二十六歳で帰郷。山形市の左官会社に勤めたあと独立し、青森銀行記念館（国指



戸袋の漆喰を復元し、銀山温泉の旅館に取り付けた伊藤富夫さん。自身が漆喰を手掛けた銀山の戸袋が多い。「昔の人はよくやっとな改めで感心する。オレも頑張る」と話す。

定重要文化財、弘前市）の外観補修や河北町紅花資料館（山形県）の黒漆喰仕上げを手掛けた。

青森銀行記念館は明治期の洋風建築で、軒や天井回りなどに蛇腹と称する凹凸の造形が連続する。この装飾的な工作の型を百種類ほど手作りし、蛇腹引きで漆喰を復元した。蛇腹引きは長野の早朝練習でも必死に取り組んだ技術。大石田と現地の職人九人、一年半がかりの漆喰復元は高い評価を受けた。

「紅葉壁」と名付けた作品もある。落葉を壁下地に貼った上に落葉のコ



戸袋の下地に漆喰を塗る鍔さばきが素早い。先端が三角に尖った斜切（しゃきり）やツルの首に似た頭首など多くの鍔を使い分ける。白漆喰を塗った面白（めんじろ）と黒漆喰の面黒（めんぐろ）の分けられ際は人差し指の腹で漆喰をすり上げる。昔家の心得も必要な文字は美しく盛り上げる。

ビニ紙を置き、壁を塗る。紙を取る
と木物の落葉が接着した模様壁とな
る。鏝絵とは別だが、長年の仕事で
培った美的感覚が表れている。

四人家族で建築士の長男は四年ほ
ど前、二級不官技能士検定にも合格
した。「後継ぎが出来ていいねと言
われてな。でもオレは現役。もっと
勉強し、職人の喜びを若者に伝えたい」と伊藤さん。「仕事以外はざっ
くばらんな人。このままでいい」と
妻のマサ子さんが優しく見つめた。

